

「家族（仮）-後編-」

—初稿—

2025/8/25
脚本 太郎

人物表

衣川	サトシ	(13)	中学一年生
荒屋	ヒトミ	(12)	長女。小学六年生
荒屋	ヒトシ	(7)	ヒトミの弟。小学一年生
衣川	孝志	(37)	サトシの父
千代	あらや	(34)	ヒトミとヒトシの母。孝志の内縁の妻

山道（夕）

サトシが車のドアを閉め、スマホを触りながら林の方へ歩いていく。

ヒトミが少し前屈みになつてドアを僅かに開け、声をかける。

ヒトミ 「どう行くの」

サトシ 「お花摘みに行くんだよ、察しろ」

ヒトミ 「歩きスマホしてると転ぶぞ、現代っ子」

サトシ 「うるせーな。（小声で）他人のくせに」

サトシ、しばらくスマホを見たまま歩き続ける。

孝志、木々の影から出てくる。サトシ、それに気付かない。

二人、肩をぶつける。

孝志、苛ついた様子で舌打ち。

孝志 「どうでもいいつも」

サトシ、『まずい』といったように顔をひきつらせ、手で顔をかばおうとする。

しかし間に合わず、孝志に思い切り顔を殴られる。

サトシ、地面に倒れる。スマホが転がる。

痛みに顔を顰めるも、すぐに何かを諦めたような無気力な表情になる。

孝志、苛立たしげにサトシを見下ろす。

孝志 「やっぱそんなツラか」

サトシ「は？」

孝志 「いや、お前の顔久しぶりにちゃんと見たけどさ、……やっぱ俺ら親子だなと思って。俺も今のお前くらいの時から、そんな風だったよ」

サトシ、不服そうな顔。

孝志、バカにしたように鼻で笑う。

孝志 「安心しろよ、お前にはあの女みたいに『車直せ』なんて無茶言わねえから。俺にできないことがお前にできるわけねえもんな」

孝志、落ちているスマホを踏みつける。

孝志 「こんなモンばっか見てて、前見て歩く」ともできないん

だから

孝志、湖の方に歩いていく。

サトシ、スマホを拾い上げる。

スマホは画面が割れている。電源ボタンを押すが、点灯しない。

舌打ち。

何度も執拗に長押しするが同じである。やがて諦めるも、名残惜しそうにスマホの画面を眺め続ける。

しばらくしてふと、車の方に視線を移す。

車内には誰もいない。

視線を泳がせる。

ヒトミとヒトシ、二人で千代からは距離のある位置に座つて湖に浮かぶ鳥を見ている。サトシの様子には気付いていない。

孝志、未だうずくまつて泣く千代の傍らで屈み、何か言う。

千代が小さく首を振る。

孝志、苛立つた様子で千代に軽く蹴りを入れる。千代から離れる。

湖に向けて石を投げ、水切りを始める。

サトシ、殴られた方の頬に手を当てる。

サトシ「痛」

顔を顰め、手を離す。

ヒトミが何やら話しながら、ヒトシの頭を撫でている。ヒトシは嬉しそうに微笑んでいる。

地面にはポタポタとヒトミの鼻血が滴っている。ヒトミは鼻血を拭う様子もなくヒトシに微笑んでいる。サトシ、しばらくヒトミとヒトシをぼーっと眺めている。

やがて大きく溜息をつき、壊れたスマホを放り捨て、独りダルそうに立ち上がる。

そして、フラフラと車の方に歩いていく。

サトシが運転席のドアを開けて乗り込む。

しばらく眉を顰め、どうしたら良いか分からぬ様子。

やがて小首を傾げ、刺さりつ放しのキーを捻つてみる。

エンジンがかかる。

サトシ「は？ マジかよ」

サトシ、拍子抜けした様子でシートに身を預ける。

サトシ「何だよ……かかんじやん」

その時、誰かの悲鳴が聞こえ、眉を顰め、

直後、窓から外を見て絶句。

3. 山道(夕)

サトシから見て、左に孝志と千代、右にヒトミとヒトシと割るように、熊が立っている。熊は威嚇の姿勢で左右どちらを襲おうか決めあぐねている様子。

4. 車内(夕)

サトシ、愕然とした表情。

やがて、悩ましげに手で顔を覆う。

5. 山道(夕)

孝志と千代は必死にヒトミたちの方に指を指し、

孝志 「あっち行け、あっち行けっての」

やがて熊がヒトミたちの方に歩き出す。

ヒトシが悲鳴を上げ、ヒトミが彼に覆い被さる。二人とも震えている。

直後、車の走行音。

走ってきた車に熊が撥ね飛ばされ、倒れる。

車の運転席にはサトシ。

サトシ、ヒトミとヒトシが居る側の窓を開け、

サトシ「早く乗れ」

しかし、四人とも腰が抜けており、呆然としている。

サトシ、溜息。

車から出て、後部座席のドアを開ける。

ヒトミが抱いたヒトシと、彼女の身体を後ろから抱えて引きずつていく。

熊が起き上がる様子はない。

× × ×

孝志と千代、未だ呆然と座り込んでいる。

車のドアが閉まる音。

二人、ハツとする。

車が発車する。

6. 車内（夕）

走行中の車の中。

運転席にサトシ、後部座席にヒトミとヒトシ。

孝志と千代の絶叫がしばらく聞こえていく。

ヒトミとヒトシ、危機が去つたことがまだ信じられない、といった様子。

ヒトミ「アンタ、車運転できたんだ」

サトシ「そんな難しくないよ。レースゲームで大体覚えた」

ヒトミ「え不安しかないんだけど」

僅かに沈黙。

ヒトミ、後ろを振り返る。

ヒトミ「これ、あの人たち置いてつて死んじゃつたらさ、何かの罪になるのかな？」

サトシ「知らねえ」

ヒトミ、卑屈に笑つて、

ヒトミ「どうせ罪になるなら、戻つてあいつらもさ、轢き殺しちゃおうか」

ヒトシ、恐怖する顔。

サトシは慄然とした表情。

サトシ「下りねえ」と考えるなよ」

ヒトミ、ハツとして、

ヒトミ「……そうだね、ごめん。……てか、それよりありがとう、助けてくれて。……正直意外だつたけど」

サトシ「別に。たまには他の暇潰しも悪くないなって」

ヒトミ「ゲームには飽きた?」

サトシ「そんなと、」

僅かに沈黙。

やがてサトシ、バックミラーを見ながら少し言いにくそうに、

サトシ「それよりさ」

サトシ、運転席と助手席の間の収納スペースに置いてあるボックステイツシュを後ろに投げる。

ヒトミ、困惑顔。

サトシ「鼻血くらい拭きなよ」

ヒトミ、自分の顔を触り、今鼻血に気付いたというような顔。

ヒトミ「うわ、痛……いつた……え、あれ? いつから?」

サトシ「……さつきからずっと」

ヒトミ、ゆっくりと鼻血を拭き始める。

そして静かに泣き出す。

ヒトミ「そつかあ……いつたいなあ……うん、凄い痛いよ」

ヒトシ、心配そうにヒトミの手を握る。

ヒトミ、泣きじやくつていて。

サトシ、バックミラーから田を逸らすようにして、

氣まずそうに、

サトシ「……悪かつたよ」

ヒトミ「何でアンタが謝るの……てかティツシュありがとお」

サトシ「いや別にそんなの……」

ヒトミ「大体アンタだつて色々大変で……（その先は嗚咽で聞こえなくなる）」

サトシ、黙つている。

ヒトミ、やがて泣き終わると、何度も鼻をかむ。

小さく深呼吸。

それからちよつと神妙な顔になり、

ヒトミ「それはそうと兄貴さ」

サトシ、驚いた様子で、

サトシ「誰が兄貴だよ」

ヒトミ 「わたしたち遭難してることには変わりないとと思うんだけど」

サトシ 「……そういうやうだな」

ヒトミ 「」、辺りを見回して、

ヒトミ 「」の車……」に向かってるのかな」

その間も車はまっすぐ進んでいく。

サトシ、少しだけ考えてから、

サトシ 「や、あなた。でもまあ」だろうと、あそ」に留まってるよ
りはずっとマシだろ」

終